

『統治論』の初版はたいへんな稀覯本で日本にはないと思われていた。この古典資料センターにも第2版しかなく、クレス＝ゴールドスミス文庫にも初版はない。ごく最近、慶応大学へ寄贈された高橋誠一郎氏の蔵書中に初版があるときいて、とくにお願ひしてみせていただいたが、これは残念ながら(?)1Rの方であった。

しかし『統治論』のいろいろな版のなかには1Xを底本としたものもあるから、どこが脱落しているか、ということだけなら容易にみることができる。たとえば1884年刊行のヘンリ・モーリ編の『統治論』は1Xそのままであって、§21のしるしはまったくない。もっとも1889年に別の書店から刊行したときには、編者モーリは1Rによることとしたらしく、脱落はなくなっている。もっとポピュラーなのはW.S. カーペンター編のエヴリマン版であって、これの古い版では脱落部分はそのままして§20は終わり、つぎの節(1Rでは§22)を§21と勝手に直し、以下§35(1Rの§36)まで節番号をひとつずつくりさげ、§35の途中に1Rにはない区切りをつくって§36として節番号を調整してしまった。ラスレットの研究がでてから、さすがにこの勝手な調整は改められたが、しかし脱落部分は復元せず、§20のあとに「この底本では第21節はない」という注をいただけである。これもじつは不正確で、第21節がまるまるないのでなく、§20の途中から§21の途中までがないのだが、エヴリマン版をみているだけではそのことは分らないし、底本の説明もないから、ラスレットの研究を知らないとこの注の意味は理解できない。J.W. ゴフが1948年に刊行したブラックウェル・ポリティカル・テキスト中の『統治論』では該当箇所脚注があり、初版では脱落があつて、“And, therefore, in such controversies……”のところから§21がはじまり、第2版で脱落がうめられた、とのべられているが、これも不正確で、1Xには§21のしるしはなく、脱落がうめられたのも第2版ではなく、もうひとつの初版なのである。

(一橋大学経済学部教授)

BLAISEに乗ったESTC

松 田 芳 郎

1 《BLAISEに乗ったESTC》という表現で人は何を連想するであろうか、ほうき(broom)に跨った魔女であろうか——現代の魔法使いの計算機に乗っているという点では、当然とも遠からずかもしれない。

ESTCは、経済学説史の研究家には、それ程なじみのないものかもしれないが、大量の文献を渉猟しなければならない社会思想史・文学史の研究家にとっては、Eighteenth Century Short Title Catalogueの略であるといえ、ああSTCの続きとうなづくはずである。もっともこのEighteenth Century STCは、それらの人々のなじみ深い A.W. Pollard and F.R. Redgrave, *A Short-Title Catalogue of Books printed in England, Scotland and Ireland...1475-1640*. London, 1926. (revised ed. 刊行中) や D. Wing, *Short-Title Catalogue of Books printed in England, Scotland, Ireland, Wales and British America...1641-1700*. New York, 1945-51. (revised ed. 刊行中) とは、三つの点で大きく異っている。第一は、これが計算機可読型目録(MARC, Machine Readable Catalogue)であって、機械検索を目標としたものであって、冊子体での刊行を念頭に置いていないこと。第二に簡略標題とはいうものの、標題の省略の度合が著しく少いこと(この18世紀のパンフレット類の多くが、標題紙一ぱいにまるで抄録の様に長い標題を付していることは多くの人が知っている)。第三に、国際的編集活動を行った成果であって、カナダ・アメリカ合衆国の北アメリカ諸国、西ドイツ・フラン

スのヨーロッパ諸国、さらにオーストラリアをも含んでいることである。

このESTCには、1701年から1800年迄の間に出版された書物・パンフレット・ちらし (ephemera) の形の印刷物で、イギリス諸島およびアメリカ合衆国・カナダ・インドを含めて英国の支配下で出版されたもの (言語を問わず) と世界中で英語または英国方言で全部または一部書かれたものを含んでいる。時期的には、イギリス古典派経済学の形成期でもあり、経済学説史・社会思想史の研究家にとっては見のがすことの出来ないものであり、たとえ常日頃計算機可読型目録というとなんとなく無縁のものと思いがちの人々もあるいは好奇心をそそられるのではなかろうか。

一方BLAISEの方は、かつてのBritish Museumの図書館部が組織替となったBritish LibraryのAutomated Information Serviceの略であるといってもあまりなじみがないかもしれない。むしろアメリカ合衆国のLibrary of CongressのMARC II に相当するUKMARCを作成管理していた組織が拡大したと呼んだ方がなじみやすいかもしれない。ただ日本で現在進行中の文部省の学術情報センター構想が、主題別拠点図書館と計算機による検索情報ネットワークの組み合わせという点で、ボストン・スパーにあるBritish Lending LibraryとBLAISEの組み合わせに範をとっていることを知る人にとって、ESTC on BLAISE という一行は、イギリスと日本との情報ネットワークに期待しているものの違いを見せつけられる思いがするであろう。なぜならBritish Lending Libraryは、イギリスの図書館行政も、自然科学・工学の情報量の急増とその検索システムの急速な展開に適応しきれなくなったことから発したとはいえ、それは一定の時の遅れを経たとはいえ、着実に伝統的人文諸学の分野にも及んできていることを示すからである。²⁾

このBLAISEでのESTCの利用はこの1982年8月からであり、私はアメリカ滞在を終えて帰国の折、去る7月にBLを訪問してBLAISEの利用契約をすませ、さらに10月のブタペストでのComité International pour l'Information et la Documentation en Sciences Sociales(UNESCO)の帰途LSEにあるBritish Library of Political and Economic ScienceのD. Clarke氏を訪問し、検索実験をすることになっていた。かねて、イギリスの図書館行政について熟知の杉山忠平教授が、BLAISEについて記せということは、この《ESTC on BLAISE》の解説を要求していただけるのであらうと思って、執筆を快諾しておいたのが、ブタペスト再訪が不可能となり、実際のESTCデータベースの検索は不可能になってしまった。従って、ここでの紹介は、筆者達が古瀬大六教授と共に開発したBASS(Bibliographic Archive for Social Sciences)プロジェクト用データベースでの検索実験、筆者の滞米中のLibrary of Congressの検索システムの利用経験を基にして、BLAISE-Line User Manual Part 31, ESTC (1982, June) を利用してのものに過ぎない。³⁾ 実際にESTC on BLAISEを利用された方の経験で補正頂けたら幸である。

このESTCが英米共同プロジェクトとして発足したのは、1976年6月にBLで開かれた会議からである。² (Frank Francis卿(前BM館長)とDouglas Bryant氏(ハーヴァード大学図書館長)の座長の会議) しかし、古版本の世界に迄計算機可読型目録を拡充して作る計画は、この時点で突然出現したわけではない。イギリスでは、1974年に報告書の出ているLOCプロジェクトもその一つであり、⁴⁾ 1960年代の中期に小樽商科大学附属図書館改革の重要な一項目として古瀬大六図書館長の下にわれわれが検討していた問題でもあった。⁵⁾

計算機可読型目録をアメリカ合衆国のLibrary of CongressのMARC II の導入としてしか意識して来なかった人々にとっては、遡及的MARC作成の試みであるRECONプロジェクトがアメリカの財力をしても支えきれないとして放棄されたとき、古版本のMARC化もおそらく意識の外にそれていったのであらう。しかし、遡及的検索が不可欠である社会科学分野の図書館の近代化には、この問題を避けて通るわけにはいかなかった。KWIC Index Series for Social Sciencesもその過程での一連の実験の副産物である。なかでも北大の佐藤茂行教授の協力を得て手塚壽郎文庫所蔵本を中核にして作成したサン・

シモン主義運動の目録は国内より国外の研究者の注目をあびた。⁶⁾けれどもわれわれの試みは、図書館改革としては日本の水準では一応の成果をあげたものの、アメリカのOCLCの様な分担機械化目録の組織として展開を見ることもなく、われわれの見取図から見ると完全な後退で最後の大がかりな仕事は、北海道地区の28の国公立大学図書館・公共図書館の所蔵した欧米の図書館・情報学文献総合目録の編集刊行で終止符を打ち、⁷⁾古瀬教授や私も含めて小樽を去り四散した。研究組織としては古瀬教授を中心に続いており、一番最近の仕事はKress文庫のMARC化であり、それを活用しての成果は近くK. Carpenter氏等の手でKress所蔵イタリア文献目録の索引としてあらわれるはずである。

こういった一連の動きとの比較で今回のBLAISEで公開されるESTCをみると、そのイギリス所蔵分の総点数は約14万点であり、しかも、これはマイクロ・フィルムによる複製本の提供と連動しているだけに、Foxwellの二つのコレクションのマイクロ・フィルム提供であるGoldsmiths'-Kressマイクロ・フィルム化文庫以上の強力な威力を発揮すると思われる。いまこれらの関係を簡単に表示するならば下表のようになる。

	収録点数	MF版提供	計算機索引	冊子体目録
[1] ESTC-MARC	139,143	あり	あり	なし
[2] Goldsmiths'-Kress MF	[22,725] ⁽¹⁾ (14,365)	あり	なし	あり
[3] Kress-MARC ⁽²⁾	28,927 (8,305)	Kress中[2]と ⁽³⁾ 重複の部分のみ	可能	あり

注(1) [] 内の点数は冊子体目録の項目番号であり、一番号に数冊の冊子が含まれていて正確な点数ではない。点数としてはこの数倍である。() 内の点数は[1]の収録範囲に合せた1701～1800年刊行の点数。

(2) このMARC版は古瀬プロジェクトとハーヴァード大の関係者間のみの限定公開(1982年12月末現在)

(3) Kress文庫目録中にはKress文庫以外のハーヴァード大学所蔵本が含まれており、それは[2]と重複しないものもあり、それ等は[2]の形ではMF(マイクロフィルム)化して市販はされていない。

3 ESTCの機械検索されることが、17世紀迄の刊本の冊子体目録による検索とどの様に違うかを検討してみる。PollardやWingの目録や類似の目録を手にしたことのある人ならば、カード体目録に比して冊子体目録の最大の利点として速読が可能なことと通読可能なことをあげるであろうし、実際に目録の通読をしたことがあるであろう。特に7—8千点の個人蔵書の目録の場合は、蒐集者が特定の主題の専門家であることが多いだけに通読して得るところも多いはずである。然しこの様に10万点を越す目録を通読することは不可能であり、何等かの検索を必要とする。しかも18世紀刊本といった所で、これから後も、各地の目録作業が進行するにつれて新規に収録されるものが何万点の位で追加されることを考えると冊子体目録は何度も改訂版を出さざるを得ない。となるとカード体目録に戻って、それぞれの人がカードで個人用のファイルを作るか、この様に計算機可読型に踏み切るかのいずれかである。

BLAISEに乗ったESTCは、大きく分けて、五種類の検索項目がある。著者・標題・出版事項・所蔵箇所・典拠文献である。これ迄BLAISEの検索の主役を占める件名・分類項目などの内容検索事項や発注などの際の武器であるISBNなどは当然含まれていない。もっとも前者の特定の分類概念による検索が不可能であっても、標題中の語彙(われわれは通常「管理された語彙」に対し「自然語」と呼んでいる)を活用することによって内容検索は一応可能である。⁸⁾また18世紀の文献を現代の様々な分類概念で律したとして果して分類し切れるかも問題であるし、それでは当時の学問区分に従って内容を分類したとして、その分類に必要な手間と比べて、それを再利用するときの効用の程は疑わしい。それはむしろ学説史研究の資料の一つとなる。⁹⁾

きて、この五種類の検索項目を使用して、われわれはESTCの全点数から自分の探したい文献を追求められる。例えば、ある年の事件に触発して刊行された文献があるかないか、自分には事前情報なかったとしても、その年の後5ヶ年または10年間に刊行された文献の一覧リストを作成し検索する。またはさらに特定の事件名または関連語が標題語中にあるかで探す。特定の著者の作品の一覧リストを作成する。場合によっては自分の知らない匿名で書けたものも検索が可能である。

興味深い検索項目として典拠文献がある。このESTCのレコードには全体で33点の典拠文献が示されている。これ迄自分の使用してきた典拠文献との照合が自動的に可能であり、これ迄のこれらの典拠文献を使用しての自分の手控えの覚書をさらに効果的に使用出来る。

問題点としては、必要箇所を抽出して自分用の部分ファイルを編集して磁気テープで送付してもらうBLAISEのサービスが適用されていないことが挙げられる。これはESTCのデータベースを一定期間保護するための適用除外であろう。

4 ESTCをBLAISEで日本から検索する上の現在の最大の問題点と思われるものは、検索に要するコスト、特に通信回線の使用料である。これは利用者の拡大につれて解決不可能な問題ではないかも知れない。むしろそれ以上に大きな問題は、自分達の周囲の研究者に見出すのは、この様な計算機の利用に対するいわれない嫌悪感か、または自分で利用し便利さを悟った暁にはそれがどのような人々の努力の積み重ねで出来たかには無関心で、単に他人の知的労働に対する収奪者としてしか動かない人々でしかないことではなからうか。

前述の Kress MARC は、全国共同利用施設の各地の大型計算機センターがMシリーズHが多いことから、ORIONシステムに乗せたKress書誌データベースとして、この1982年10月に試験的に公開した。(ただ現在の形では、ダイアクレティックの処理などが十分ではないので、最終的には独自のシステムで公開することが必要であろう。) かつて小樽の頃の同僚の一人が《フリードリッヒ大王型の啓蒙君主のごとき上からの図書館改革に敗退し、一転しサン・シモン主義者のごとく日本中を放浪するのか》とかなかったことがある。この試みが、スエズ運河を切り開く役を果すのか、単なるユートピアンの試みで終るのか、今の時点ではいずれともいうことは出来ない。

- 1) R.G. Alston and M.J. Jannetta, *Bibliography Machine-Readable Cataloguing and the ESTC*. London, 1978
およびその後の展開には *Factotum, Newsletter of the XVIIIth Century STC* (カット参照) を参照のこと。
- 2) 松田芳郎「社会科学の展開の量的分析のためのデータベース編成」『一橋論叢』80-2, 1978。
- 3) 詳細は古瀬大六研究代表者文部省科学研究費総合研究報告書「社会科学におけるデータのデータ構造の研究」(近刊)参照。
- 4) 松井幸子「書誌情報の共同利用ファイルの作成」『ドキュメンテーション研究』27-4, 1977にLOCプロジェクトを含めて解説がのっている。また鈴木亮研究代表者文部省科学研究費総合研究報告書『経済理論史を中心とした機械可読書誌編纂の技法の研究及びデータベースの作成』1978参照。
- 5) 松田芳郎「Deus ex machinaなしの図書館近代化」『経済資料研究』4, 1971。
- 6) *Bibliography: Works on Saint-Simon and Saint-Simonians, 1831-1970*. 1973
(KWIC Index Series for Social Sciences, No 3)

FACTOTUM

Newsletter of the XVIIIth century STC

No 12 July 1981



HIS newsletter is designed to give news of the activities and progress of the ESTC. It is intended for circulation to all those who are interested in the project, and more particularly those librarians who are giving practical assistance by contributing catalogue entries for the books in their own libraries

FACTOTUM, n. s. [See vocum, Latin. It is used likewise in burlesque French.] A servant employed at home in all kinds of business, as Scroob in the *Stratagem*.
Johnson's Dictionary, 1786 edition

Scroob 'T's a perfect slave - What d'ye think is my place in this family?
Archer Butler, I suppose
Scroob 'Ah, Lord help you - I'll tell you - Of a Monday I drive the coach, of a Tuesday I drive the plough; on Wednesday I follow the hounds, a Thursday I dun the tenants, on Friday I go to market, on Saturday I draw warrants, and a Sunday I draw beer
Archer 'Ha' Ha' Ha! if variety be a pleasure in life, you have enough on't, my dear brother -
Farquhar *The Spanish Stratagem*

It is edited by J. L. Wood and A. D. Strenberg at the British Library Reference Division, Great Russell Street, London WC1B 3DG

ISSN 0141-3635

- 7) *Bibliography: Works on Library and Information Science*. 2 vols, 1974 (KWIC Index Series for Social Sciences, No.4)
- 8) Y. Matsuda and S. Matsui "Effectiveness of KWIC Index as an Information Retrieval Technique for Social Sciences." *Hitotsubashi Journal of Economics*, 15-2, 1975.
- 9) 当時の分類を利用して著作家の蔵書目録の意義を検討したものに津田内匠『チュルゴの蔵書目録—フランス国立図書館所蔵の手稿による』3 vols. 1974 に付した「Turgot (1727—1781) の蔵書」がある。

福田徳三と武藤長蔵 —チャイルドをめぐる—

杉 山 忠 平

福田徳三は『経済論叢』第1巻第1号から第3巻第5号にかけて、6回にわたって「でづゐつど・ひゅーむノ経済学説」を寄稿した。1915(大正4)年から1916(大正5)年にかけてである。この一連の論文は、その表題にもかかわらず、ヒュームの経済思想の研究ではなく、むしろそれにさきだつイギリス重商主義の概観というべきものである。おそらくそのために、福田はこれを彼の『経済学考証』(1918)に収録するにあたって、表題を「英国の学問としての経済学殊に商国主義の始終」と改称した。福田のいう商国主義がマーカントイズムを意味することはいうまでもない。

その連載第2回のなかで福田はジョウサイア・チャイルドを扱っている。「ちゃいどの著作中最モ普ク知ラルモノハ A new discourse of Tradeニシテ予ノ蔵スルハ千六百九十八年刊行ノ本ナリ。(版数ヲ明記セズ、予ハ之ヲ第四版ト考フ)。」1698年版を第4版とする推定は誤りだが、やむをえない。「此書物初メハ Brief observations concerning trade and interest of money ト題シテ千六百六十八年ニ出版セラル。其ノ Discourse of Tradeト改題シタルハ何レノ印本ナリヤ予ハ之ヲ見ザルガ故ニ知ル能ハズ」。こう書いた上で、福田はマカロックの *The literature of political economy* (1845) から、この本の初版は1668年に、大幅に増補された第2版は1690年に出たという一文を引用する。「察スルニ此千六百九十年版ニ於テ改題シタルモノニアラザルカ。少クトモ千六百九十四年刊行ノモノニ A new discourse of trade, wherein is recommended several weighty points……The second edition ナルモノアルコト丈ケハ確ナリ。(此書高商書館ニ在リ……) 其特ニ第二版ト明記シアルヲ注意ス可シ。まかろつく云フ所千六百九十年版本ナルモノ果シテアリヤナシヤ」。つまり1668年の *Brief observations* が初版で、「高商書館」すなわち東京高等商業学校の図書館にある1694年の *A new discourse* が第2版だとすると、マカロックのいう1690年版は本当に存在するのだろうかというわけである。この疑問は、もちろん、まちがいである。

しかし、マカロックが「其目録ニ掲ゲタ」のは1751年版だから、彼が実際に1690年版を「自ラ見タルモノナリヤ聊カ疑ハシ」という疑問はおそらく正しい。わたしもマカロックは「それぞれの〔版の〕あいだの推移をしっている様子がない」と書いたことがある。⁽¹⁾

福田はマカロックが1751年版を第5版としていることをあげ、「然レバ版本ノ種類ハ凡ソ左ノ如クナル可シ」として、推定結果を列記している。⁽²⁾

- 第一版 改題以前ノモノ 一六六八年刊(私蔵本)
- 第二版 改題ノ第一版 一六九〇年刊(見タルコトナシ)
- 第三版 改題ノ第二版 一六九四年刊(高商蔵本第二版トアリ)